

国立

国会

図書館

月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2019.5



新連載 資料の世界の歩き方 写真を読む 第1回

西園寺公望と写真

国立国会図書館にない本

戦前の全集月報附録類

国立
国会
図書館
月報

NO. 697
MAY 2019

CONTENTS

- 1 『甘諸百珍』
江戸時代のサツマイモ料理
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 5 資料の世界の歩き方 写真を読む
第1回 西園寺公望と写真
- 15 国立国会図書館にない本
戦前の全集月報附録類
- 24 館内スコープ
「児童書研究資料室」はこわくない
- 25 本屋にない本
『世界の軌跡を未来の英知に』
- 26 NDL TOPICS



表紙：
『舞姿 祇園画集』口絵
長田幹彦、吉井勇 著 中沢弘光 画 阿蘭陀書房
大正5 18 cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/912393/11>
(モノクロ画像)

『甘藷百珍』 江戸時代のサツマイモ料理

永村 恭代



(右) 標題紙
(左) 琉球の芋売りの図

『甘藷百珍』

珍古楼主人 輯 平野屋半右衛門 [ほか3名] 寛政1 [1789]
1冊 21cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536724>

「〇焼」「八里半」「十三里」。これらは江戸時代のお店の看板の文字です。甘くて、ほくほくの焼きいも屋の看板です。

「〇焼」は皮つきのサツマイモを丸ごと焼くので「〇焼」。「八里半」はサツマイモが栗（九里）に良く似た味なのですが、わずかに劣るという意味で少し距離を引いて「八里半」。「十三里」は栗（九里）より（四里）うまいということで九里と四里を足して「十三里」です。

中南米から世界に広まったサツマイモは、慶長10（1605）年に琉球に伝わり、その後、西日本に広まります。享保の飢饉（享保17（1732）年）の後、「甘藷先生」として有名な青木昆陽（儒者、蘭学者。1698・1769）は、『蕃藷考』（享保20（1735）年刊）を著し、凶作の年でも収穫できるサツマイモの栽培の普及に尽力します。幕府の後押しもあり、サツマイモは東日本にも広まります。

各地に広まったサツマイモの料理方法は、焼きいもだけではありませんでした。百二十三種の料理方法を紹介した『甘藷百珍』が寛政元（1789）年に刊行されています。

『甘藷百珍』は、天明2（1782）年に刊行された『豆腐百珍』の構成をまねています。

『甘藷百珍』の目録に掲載された全123品目。



「奇品」

風変わりな料理で、面白い見立て料理が含まれます。鯨の本皮に見立てた「海鱈いも」、氷柱に見立てた「氷柱いも」など63品目を紹介しています。

- ▶「海鱈いも」生のサツマイモをおろして鍋墨（原書では「釜底墨」。鍋や釜などの尻についた黒いすす）で色を付けたものを蒸し箱に二分（約6mm）ほど敷き、その上に色を付けていないものを一寸（約3cm）敷いて蒸して切り、油で揚げます。
- ▶「氷柱いも」生のサツマイモを細く切って、葛粉をまぶして茹でます。

「尋常品」

日々の生活で作られている料理です。「飛龍頭いも」や、「蒸いも」、「焼いも」など、比較的簡単に作れそうなもの21品目です。

- ▶「飛龍頭いも」すりおろした生のサツマイモに豆腐を少し加え、銀杏、きくらげ、麻の実、もやしなどを包んで油で揚げます。

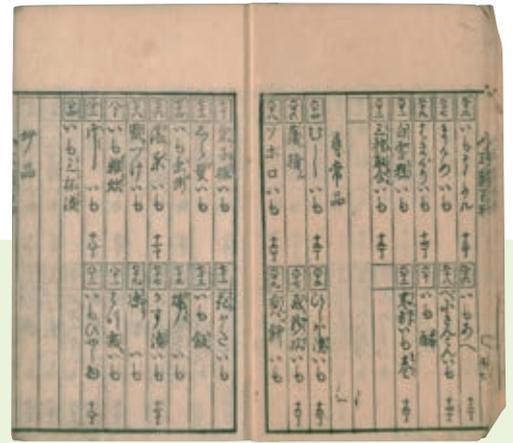
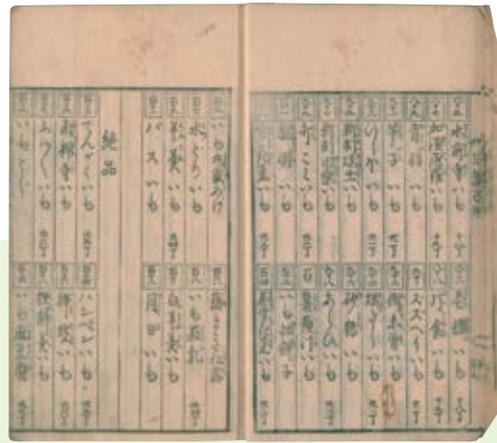


尋常品の料理方法。当時一般的だった料理は説明を省略しています。

す。『豆腐百珍』は、百の豆腐料理を、尋常品・通品・佳品・奇品・妙品・絶品の六つに分けて紹介しています。大変人気を博し、その後、『鯛百珍料理秘密箱』、『海鱈百珍』、『蒟蒻百珍』といった百珍物が刊行されました。『甘藷百珍』もそうした百珍物のひとつです。

江戸の町には、寛政5（1793）年の頃には焼きいも屋があったようで、江戸の様子を記した『宝曆現来集』巻之五に「芋を焼て売事、寛政五年の冬本郷四丁目番屋にて、初て八里半と云ふ行燈を出し、焼芋売始けり」とあります。焼きいも屋は、文化・文政の頃（1804～1830年）には大繁盛しました。江戸時代の焼きいも屋の様子は、浮世絵や書物にも描かれています（P4参照）。

今も焼きいも屋があるように、サツマイモは、今も昔も愛されています。



「妙品」

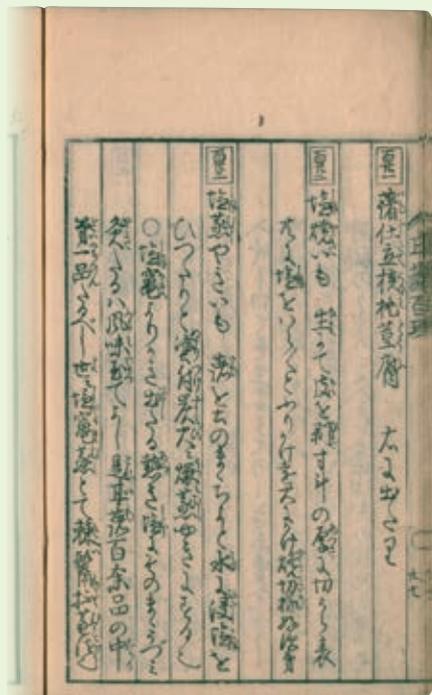
形よし味よしの料理です。「加須底羅いも」、「月日いも」など、28品目です。

- ▶「加須底羅いも」すりおろした生のサツマイモに卵、砂糖を加えて焼きます。
- ▶「月日いも」皮をむいた大きめのサツマイモを薄く切って熱湯に浸し、取り出してから砂糖味噌で味をつけて編笠の形に折ります。

「絶品」

妙品よりも優れていて絶妙の調和がある料理です。「田楽いも」(下画像①)、「樺焼いも」(②)、「ふはふはいも」(③)など、11品目です。絶品の最後から二番目は「塩焼いも」で、「甘藷百珍」の最後を飾る絶品は「塩蒸やきいも」です。

- ▶「田楽いも」すりおろした生のサツマイモを蒸して田楽にします。
- ▶「樺焼いも」すりおろした生のサツマイモを蒸して、海苔をひっつけ、ごま油をひいて山椒醤油を付けて焼きます。
- ▶「ふはふはいも」すりおろした生のサツマイモをすり鉢ですって濾して卵を混ぜて、醤油のだし汁にお酒を足して煮立てた中にすくい入れます。
- ▶「塩焼いも」皮をむいて切り、塩を振って遠火で焼きます。
- ▶「塩蒸やきいも」サツマイモを水に浸して、塩をびったりとぬり、炭火にうずめて蒸し焼きにします。



絶品の「塩焼いも」「塩蒸焼いも」の料理方法。

調理例



①田楽いも
生のサツマイモをすりおろして作る料理は、蒸したものをつぶして作るのとは違う甘さがあります。



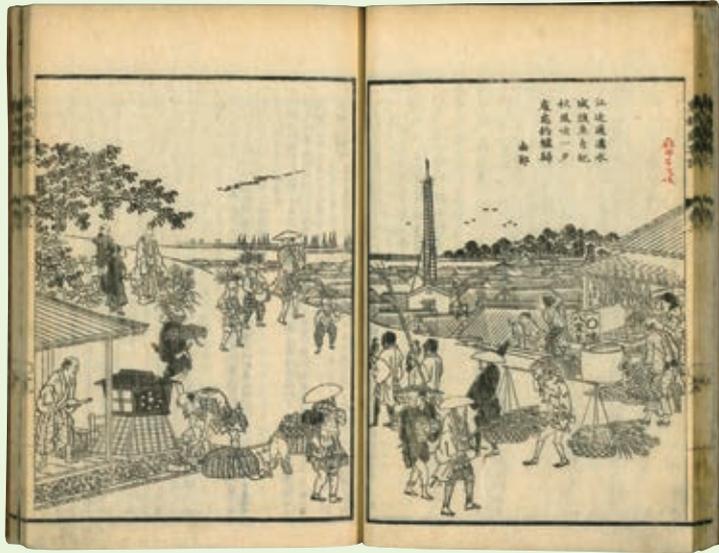
②樺焼いも
魚の蒲焼風に作りました。サツマイモの甘さと山椒醤油の塩味で、箸がすすみます。



③ふはふはいも
その名のとおり「ふわふわ」です。だし汁との相性が良く、なめらかなのでこして何杯でも食べられます。

※いずれも筆者が調理したものを撮影。

描かれた焼きいも屋



(右上)「名所江戸百景 びくにはし雪中」
歌川広重(1世)画 魚屋栄吉 安政5〔1858〕(『名所江戸百景』所収)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1312350>

現在の東京の有楽町駅の近くにあった比丘尼橋の風景を描いています。右側に焼きいも屋の「〇やき」「十三里」の看板が見えます。左側に描かれた「山くじら」はイノシシ肉などの獣肉のお店の看板です。

(上)『東都歳事記 4巻付録1巻』斎藤月岑 編 長谷川雪旦 画 長谷川雪堤 補画
須原屋茂兵衛、須原屋伊八 天保9〔1838〕
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8369318/21>

江戸と江戸近郊の年中行事を解説した『東都歳事記』の挿絵に、「〇焼」「八里半」の看板が見えます。

(右下)『金儲花盛場 2巻』十返舎一九(1世)作 歌川安秀 画 山口屋藤兵衛 文政13〔1830〕
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10301737/9>

十返舎一九の『金儲花盛場』には、高貴なお姫様が焼きいもを買い求めた話が登場し、「八里繁昌 うれるやきいも」とあります。



- 1『豆腐百珍』曾谷学川輯 藤屋善七 天明2〔1782〕
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536494>
- 2『鯛百珍料理秘密箱』器土堂主人〔著〕西村市郎右衛門〔ほか5名〕天明5〔1785〕
<請求記号 121-103>
- 3『海鰻百珍』梶川七郎兵衛〔ほか3名〕寛政7〔1795〕<請求記号 182-149>
- 4『蒟蒻百珍』嗜蒻陳人〔著〕〔江戸後期〕
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536696>
- 5『宝暦現来集』山田桂翁〔著〕〔写〕<請求記号 211-537>
(国書刊行会 編『近世風俗見聞集 第三』国書刊行会 1912
(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1750791>) 所収)

○参考文献

いも類振興会 編『焼きいも事典 美味しさ・栄養・品種・栽培・焼き方・料理・歴史・文化』
いも類振興会 2014.10 <請求記号 RB2-L43>

資料の世界の歩き方

写真を読む

あしな
葦名 ふみ



インターネット上に写真や映像があふれる中、図書館や文書館の持つデジタルな情報資源の価値も再発見されつつあります。

国立国会図書館もまた、写真集を多数収蔵しています。その傍ら、近現代の肖像写真を提供する電子展示会「近代日本人の肖像」などを通じ、写真の画像としての循環を支え、時代や事象のイメージを表現することに貢献してきました。

翻って、既に流布している画像のオリジナルの写真は何か、どんな背景で撮られたものか、といった謎解きも写真を読み解く上での醍醐味です。

この新連載（不定期）では、当館の知られざる写真や関連記録——当館の写真帖、新聞に掲載された写真、政治家や軍人の旧蔵写真（憲政資料室所蔵）——などに材をとりながら、「写真の読み方」をご紹介します。特に読み解き方が難しい古い写真の撮影技法や撮影の背景事情にも注目してみます。

第1回は、写真を撮られることについてきわめて意識的であった、ある政治家について取り上げます。



各写真の出典は p.14

「資料の世界の歩き方」は、国立国会図書館の所蔵する資料のうち、少し難しそうな資料を取り上げて、その「読み方」をまなぶシリーズです。

第1回 西園寺公望と写真



1 静岡県興津の別荘・坐漁荘のサンルームにて
<原田熊雄関係文書 92 >

2 坐漁荘の前でたたずむ西園寺
<憲政資料室収集文書 1477-60 >

写真と個人的な出会い方をした一人の著名な政治家がいます。その人は、上のような写真を残しています。さりげない日常に見えて、文房具の配置はどこか作爲的で、えもいわれぬ緊張感も感じさせる一葉です。

この人は、第二代・一四代首相にして、最後の元老・西園寺公望です。この小稿では、趣味人、フランス通とさまざまな評の与えられた西園寺公望と写真との知られざる関わりを、国立国会図書館の資料に導かれながら辿ってみます。

写真嫌い？

西園寺公望と写真——このことを考えるとき、西園寺は果たして一般に言われるように「写真嫌い」だったのかという謎に突き当たります。昭和一五（1940）年の新聞に西園寺の「写真嫌ひの秘話集」という記事が載ったことがあります¹。確かに、写真を撮ろうとするカメラマンに対する西園寺の抵抗を示すエピソードを数え上げるときりがありません。

晩年の西園寺は、静岡県興津（坐漁荘）で主に暮らし、季節や所用に応じて駿河台（本邸）、京都（清風荘）、御殿場（別邸）を行き来したため、邸宅間の往来は貴重

西園寺公望 (1849-1940)

父は右大臣徳大寺公純。西園寺師季の養子となる。戊辰戦争に参加。明治4(1871)年、フランス留学。滞仏10年ののち帰国し明治法律学校を設立。中江兆民らと『東洋自由新聞』を創刊。15年伊藤博文の憲法調査に随行し渡欧。オーストリア、ドイツ、ベルギー各国の駐在公使をつとめる。帰国後、賞勲局総裁、枢密顧問官など経て、第2次伊藤、第2次松方、第3次伊藤各内閣の文相、外相となる。33年枢密院議長。36年立憲政友会総裁。39年首相となり、以後桂太郎と交互に首相をつとめた。大正8(1919)年、パリ講和会議の全権委員。9年公爵。最後の元老として大正末期から昭和初期にかけて、後継首相推薦の任にあたった。



3 御殿場から興津へ帰る途上の西園寺。御殿場駅にて。昭和13(1938)年9月。
<憲政資料室収集文書 1477-19 >



4 明治村(愛知県犬山市)に移築された坐漁荘。(筆者撮影)

大正9(1920)年に建てられた坐漁荘の建築や移築の過程、歴史的資料をまとめた有用な文献として『西園寺公望別邸「坐漁荘」修理工事報告書』博物館明治村 編著、明治村、2015 <請求記号 KA237-L113>

なシャッターチャンスとなりました。西園寺はしぶしぶと撮らせたものの、しつこい場合は怒ることもありました。昭和九(1934)年七月三日に興津から御殿場に避暑に出かける際に、興津駅のプラットフォームで新聞各社の写真班がカメラを入れ替わり立ち替わり向けたところ、「無礼者!」と大喝し、駅は大騒ぎとなったといえます。

『東京日日新聞』の、ある西園寺付の記者は、西園寺が晩年を過ごした興津の別荘「坐漁荘」の裏庭を散歩する姿を撮る際に、清水から興津まで一里の道を毎朝二か月間通ったあげく、昭和六(1931)年三月二日になってようやく漁船の影に身を潜めて撮影できたといささか大袈裟にも思えるような話を——後年に回顧しています。²⁾

肖像写真の贈呈

しかし、西園寺は自分の肖像写真を贈呈する習慣を持ち、その始まりは少なくとも明治四(1871)年に遡ります。この時期に写真贈呈を開始したのは、日本人としてかなり早い部類に属し、「写真嫌い」という評価は、一面的にも思われ



6 中江兆民の在仏時代のウィンドウアルバム。受け取ったり購入したりした写真を差し込んだ。
 <中江兆民関係文書 48 >



7 在仏時代の兆民が両親にあてた絵手紙。写真にはリヨンのサン・ジャン大聖堂が見える。
 中江兆民書簡 中江柳・中江虎馬宛
 1873年1月3日付<中江兆民関係文書 23 >



5 フランス留学出発前の西園寺
 『西園寺公望伝』木村毅著、伝記刊行会、1937 <請求記号 747-168 >

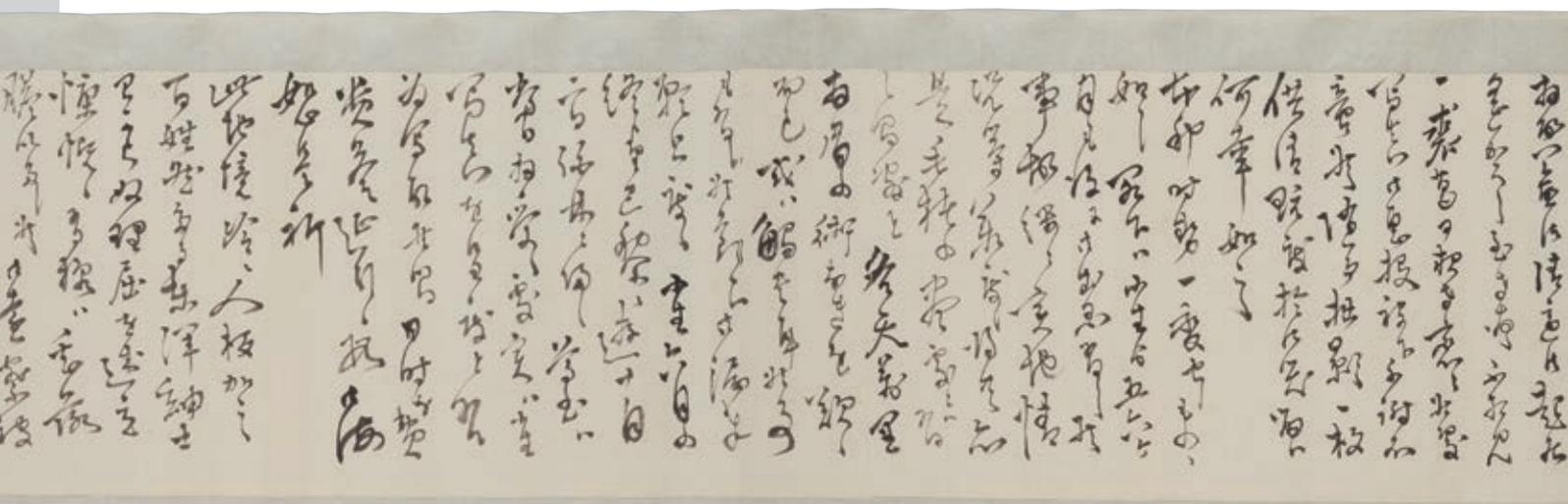


西園寺の記した——あるいは——受け取った手紙は、写真の授受がいかに行われたかを見出す好史料ともなります⁽³⁾。西園寺において自らの肖像写真を知人に送るという習慣は、十年弱に及ぶフランス留学時代(1871-1880)から断続的に続いていくようです。

パリの息吹

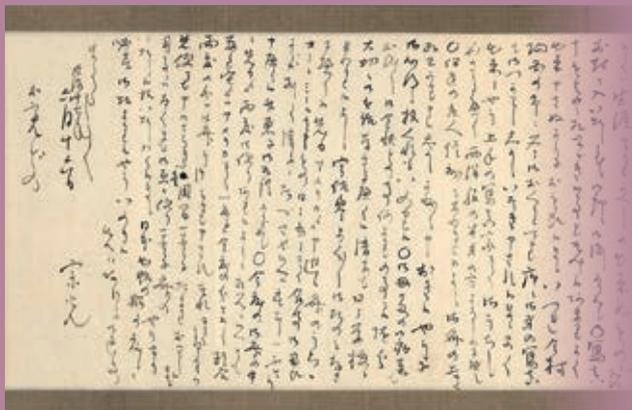
パリ到着から数か月が経った明治四(1871)年六月二十七日、西園寺は漢学の師匠にあたる伊藤轡斎宛に「本州之近況如何」「縷々伝聞或ハ喜或ハ憂、日々不堪相想候」と望郷の思いを書き綴りつつ、「望一郎「西園寺のこと」筆者註」写真御慰ミニ献候」と写真を送っています⁽⁴⁾。また同年九月三〇日、西園寺家の留守を預かる橋本実梁宛に「写真一枚献上候。於御笑留は畏入存候」と写真を送付しています⁽⁵⁾。

西園寺留学時のパリは、名刺交換ならぬ写真交換の流行期でした。滞仏時期が重なり交友を結んだ中江兆民が残した滞在時代のアルバム(画像6)は、いわゆる名刺判写真(カルト・ド・ヴィジット)など、肖像写真の宝庫であると同時に、パリの息吹を鮮やかに今に伝えます。



9 陸奥宗光から陸奥亮子（妻）宛の書簡

明治 17 (1884) 年 6 月 16 日付<陸奥宗光関係文書 55-6 >



陸奥宗光と陸奥亮子

ヨーロッパ外遊中の陸奥宗光もまた、遠方の地にあつて、妻・亮子に「西洋服の半身」の写真を上手な写真師に撮らせて送るよう、注文を付けています。美人の誉れ高く、「鹿鳴館の華」と謳われた亮子は、西洋服の半身の有名な写真を残しています。この写真が宗光の注文に応じて撮られたものかどうかは断定できませんが、写真の由来を示すかもしれない手紙として、興味深いところです。



陸奥亮子肖像『憲政五十年史 画譜』補再版 画譜憲政五十年史刊行会編 1942 <請求記号 430-121 イ>

陸奥宗光と西園寺公望

西園寺が写真に託した心情を特によく物語るのが、陸奥宗光との手紙の遣り取りです。早逝した陸奥が遺言で西園寺に墓碑の揮毫を頼んだというエピソードもありますが、西園寺は陸奥の実力を見出し、二人は厚い友情に結ばれていました。ヨーロッパ巡遊からの帰国後、外務省に奉職していた陸奥が、西園寺（明治二〇（一八八七）年六月から任駐ヘルリン・ドイツ帝国公使兼ベルギー公使）に自らの写真を送ったことがあります。

西園寺は、明治二一（一八八八）年一月二日に陸奥の手紙と写真を受け取り、一月五日に、礼状をしたためました（画像8）。「不相見一裘葛日夜奉恋々候処写真御恵投被下千謝不替候。随而拙影一枚供清玩度於御笑留ハ何幸如之」と異国での寂しさを陸奥の写真によって慰められたと、直截な表現で陸奥に対して感謝の意を綴ります。

その上で、陸奥に写真を送ろうと写真撮影を試み、返信が遅くなったことを詫びています（小生六月の終より巴黎二遊十月二日伯林二帰候。尊書ハ当日拝受候処実ハ小生写真を呈度と右為写取候間日時を費、貴容延引候段御海怨是祈）。



10 坐漁荘の応接間兼洋間

中央は電気式暖房機（電熱器を配し、マントルピース風に整えられている）。熊谷八十三の日記「又新日録」（昭和4年11月27日付〈熊谷八十三関係文書 49〉）によれば、「中野愛之助氏来テ洋間ニ洋画ヲ掛ケル Claud Monet の公園ノ景 之が一万円トカヤ（中略）Oufeu, Palaise des Doges á Venise 次ガ水彩画デ Gouking Marive アリ」とある。絵画が架されていた時期の応接間の様子を示す稀少な写真。
 <憲政資料室収集文書 1477-11 >



11 マッシュルームの水煮（仏国製の缶詰を開きたるもの）

木島常司『マッシュルームの栽培』誠文堂書店、1928 <請求記号 586-49 >

はにかむ西園寺

西園寺において自らの肖像写真を贈る慣習は、懇意の、ごく限定された相手に対するものだったようです。写真を送る際の手紙を繻くと、西園寺は「御笑草に」などと書き添え、合羞やはにかみを示すことに気づかされます。竹越与三郎（政治家・歴史家）に対しては、「政友会総裁となりての写真、御笑草に」と、内藤湖南（東洋史学者）に対しては「写真二枚いづれも略着用欠敬ニ候得共御笑草ニ呈上候」といった具合です。

珍しい「プライベート」の写真

その西園寺が、自ら興津にある自邸・坐漁荘の室内でプライベートな自分の写真を撮らせたことがあります。興津の園芸試験場に勤務経験のある熊谷八十三（西園寺の執事的な役割も務めた）が、とある技師・木島常司の撮った富士山の写真を西園寺に見せたところ、自邸に招き入れて撮らせることを納得したという非常に珍しい状況でした。

木島は、プロの写真師ではありません。画像11は彼の撮影した写真のうちの一葉です。

被写体が珍しすぎるため、写真の巧拙



12 坐漁荘の応接間にて

右肩にある「石原老兄」とは、写真を贈られた相手である石原助熊（1871 - 1942）のこと。石原の母は大久保利通の姉・みね。帝国大学農科大学卒、園芸研究に生きた石原は興津の坐漁荘にも出入りし、その出入りは「木戸御免」だったといわれる。額縁は竹製。竹を愛した西園寺へのオマージュだろう。

<石原助熊・よし関係文書 17 >

を判じ難いですが、この水煮を撮影した木島は、マッシュルームの普及に尽くした興津の試験場の技師でした。上下を返したりしながら、光線も入れる。マッシュルームへの思い入れの深さを感じさせる一枚です。

木島は昭和五（1930）年一月に坐漁荘において撮影を行いました。後日、現像が出来上がり、木島は写真へのサインを西園寺に希望しますが、現像の際の控えの写真を持つことは許可されたものの、サインは断られました¹⁰。

当の撮影者（木島）は、サイン入りの写真を手に行うことはできませんでした。しかし、西園寺は木島撮影の写真に直筆でサインを記し、興津の試験場に勤めていたこともある石原助熊に贈りました。上の写真がまさにそれです（近年、当館憲政資料室に寄贈された「石原助熊・よし関係文書」に収められています）（画像12）。背景から、坐漁荘の応接間にあるマントルピース風に整えられた電気式暖房機（画像10参照）の前での撮影と断定できます。

同じショットの写真は、サインの上、昭和五（1930）年三月一七日にも、原嘉道（元司法相）の手元に届けられました



伝書鳩（イメージ図）。通信筒は足に付けることも多い。



（絵・正保（五月））



13『西園寺公追憶』中央大学，1942 <請求記号 W346-48 >

14 西園寺公望伝編纂部 編『西園寺公望伝 第1輯』
西園寺公望伝編纂部，1934 <請求記号 640-186 >

た。西園寺公の写真を所望していた原の希望を原田熊雄（秘書）が取次ぎ、西園寺が特使に届けさせたものです。写真と同時に届けられた手紙の中で、西園寺は「甚不出来」「於御叱留ハ大幸不過之」と撮影の悪さを強調します^{〔1〕}。慎重深さを發揮した文面というべきか、より良い写真を期待したのか、本音は読めません。

新聞記者との攻防

西園寺の「写真嫌い」の評の背景にあった第一の理由としては、実務上の問題がまず考えられます。西園寺は首相選定に晩年まで影響力を持っていた最後の元老です。坐漁荘への来訪者の動静は、政局の変事においては、注視の対象でした。

老公の 寫真輸送ると わが社機は さつき空たかく 舞ひあがりたり^{〔1〕}

西園寺付のある新聞記者による歌です。昭和七（1932）年五月、犬養内閣が五・一五事件によって倒れたため、五月一九日には、齢八四歳の西園寺が後継首相の奉答のために上京することとなりました。写真電送が本格化する前のこと、新聞各社は速報の写真を送るために伝書



15 最後の病状発表。熊谷八十三執事の周りに群がり、メモを取る記者たち。昭和15(1940)年11月。
 <憲政資料室収集文書 1477-82 >



16 靈輿を運ぶ人々。西園寺の棺は坐漁荘から国葬のために特別列車で東京に運ばれる。柱の陰にカメラを構える人物も見える。昭和15(1940)年11月28日。
 <憲政資料室収集文書 1477-35 >

鳩を用意したり、海に面した坐漁荘から、海路を経て飛行機で東京に運ぶなどの対応を取ったりしたと伝えられています。体調不良程度でも大袈裟に報じられれば政治的な憶測を呼び、警備に支障をきたす。あるいは西園寺が目立てば元老批判を生む。そうした状況が加速する中で、西園寺やその周囲は、写真に限らず偶発的なスクープをとられることについて、慎重であつたといえます。

自己イメージの堅持

もう一つの理由として浮かび上がるのは、端然とした自己を作り、そうしたイメージを崩すまいとする一貫した姿勢です。

西園寺が亡くなったのは昭和一五(1940)年一月二四日(享年九二歳)のことですが、西園寺は嗣子・八郎に対する遺言(覚書)において、死後の写真を撮らないよう、指示しています。⁽¹³⁾

- 一、デスマスク並に死顔の写真は絶体写すべからず。
- 二、我が伝記編纂すべからず、する者有らば一切断る事。並に銅像彫刻も同じ。
- 三、私書並に報告類等総て焼却し終れり。

17 原田熊雄の家族アルバムより。原田は西園寺公望の秘書役をつとめた。少女たちの視線の先にはアルバムがある。原田はカメラに凝り、スーパーイコンタ（1934年に発売されたスプリングカメラ）を入手したと伝えられる。

<原田熊雄関係文書 84 >



- 1『朝日新聞』1940年11月28日付
 - 2 北野慧『人間西園寺公』大鳥書院, 1941 <請求記号 289-Sa22-4 ウ> pp.181-184
 - 3 西園寺の関係書簡集としては、その発信書簡が意欲的に収集された立命館大学西園寺公望伝編纂委員会 編『西園寺公望伝 別巻 1』岩波書店, 1996 <請求記号 GK123-E61 > や山崎有恒, 西園寺公望関係文書研究会 編著『西園寺公望関係文書』中西印刷出版部, 松香堂書店, 2012 <請求記号 GK191-L35 >
西園寺の最近の伝記的文献として、岩井忠熊『西園寺公望 最後の元老』(岩波新書) 岩波書店, 2003 <請求記号 GK123-H4 > ; 永井和『西園寺公望 政党政治の元老』(日本史リブレット人; 090) 山川出版社, 2018 <請求記号 GK191-L759 > ; 伊藤之雄『元老西園寺公望 古希からの挑戦 (文春新書)』文藝春秋, 2007 <請求記号 GK123-J2 >
 - 4 同上『西園寺公望伝 別巻 1』pp.22-23
 - 5 西園寺公望関係文書(橋本実梁旧蔵) 5 (同上『西園寺公望伝 別巻 1』p.214)
 - 6 陸奥宗光関係文書 27-1 (同上『西園寺公望伝 別巻 1』p.260)
 - 7 明治 36 年 8 月 3 日付 (同上『西園寺公望伝 別巻 1』p.159)
 - 8 昭和 4 年 8 月 2 日付 (同上『西園寺公望伝 別巻 1』p.184)
 - 9『朝日新聞』1940年11月28日付
 - 10『又新日録』熊谷八十三関係文書 49, 1940年2月9日付
 - 11 中央大学 編『西園寺公追憶』中央大学, 1942 <請求記号 W346-68 > pp.6-7
 - 12 北野慧『人間西園寺公』大鳥書院, 1941 <請求記号 289-Sa22-4 ウ>p.241
 - 13 立命館大学西園寺公望伝編纂委員会 編『西園寺公望伝 第4巻』岩波書店, 1996 <請求記号 GK123-E61 > pp.435-436, p.443
- p.5の写真右上から時計回りに、『幕末名家寫真集 第1集』『大正震災写真集 大正十二年九月』『大正元年海軍大演習写真帖』『滑空機 昭和16年版』『陸軍特別大演習並ニ御親閲記念寫真帖』『京都名所帖』

当館所蔵の西園寺公望ゆかりの文書資料

「石原助熊・よし関係文書」興津にて西園寺を支えた技師の資料。坐漁荘の資料も含まれる。

「小泉策太郎関係文書」西園寺の自伝をまとめた文筆家・政治家の旧蔵文書。

「熊谷八十三関係文書」興津にて西園寺を支えた技師の日記。坐漁荘における西園寺の動静についても詳しい。

「西園寺公望関係文書(橋本実梁旧蔵)」西園寺の滞仏時代の書簡。

「中江兆民関係文書」書簡や出版関係書類等。

「原田熊雄関係文書」西園寺の秘書役を務めた原田熊雄の旧蔵文書。「西園寺公と政局」の原稿。

「陸奥宗光関係文書」西園寺と親しかった陸奥の旧蔵書簡、外交関係書類等。

※いずれも東京本館憲政資料室所蔵

四、一切の書物並に印・硯・骨董の類は公一と相談の事。但し急に処分すべからず。よくよく取調の上処分すべし。(後略)

死後の写真撮影の禁止にまで言及した異色の遺書です。周囲が死顔を撮ろうとするかもしれない、との恐れが遺言から垣間みえます。五・一五事件の後、ときの犬養首相のデスマスクが新聞に掲載されたことを考えれば、西園寺の心配もあながち的外れとはいえません。病床にあった西園寺の一挙手一投足は記事に報じられ、日比谷公園で一二月五日に行われた西園寺の国葬は盛大なものとなります。

仮に、政治家やアイドルでなくとも、あらまほしき自己イメージを残したいと考えることは当然の感覚です。しかし、西園寺は、その影響力の大きさから、自己のイメージに過敏にならざるを得なかったようにも思われます。九二年間の生涯の間に写真や撮影をめぐる技術は大きく変化しています。死の直前までカメラに迫られた西園寺と写真との付き合い方からは、慎み深さと自意識、その両方が増幅された形で顕わになっているようにも思えるのです。

戦前の全集月報附録類

国立国会図書館にない本

鈴木 宏宗

全集月報附録類とは何か

本を買うと、しおりや刊行案内、附録といったものが、ページの間に挟み込まれていることがある。つい

つい読んでしまうことが多い。いわゆる講座もの、著作集や全集といったシリーズには、たいていの場合は、一冊ごとに「○○全集月報」

「□□著作集しおり」と銘打ったものが、本のなかに挟まれている。全集などが刊行されるたびに、おまけとしてついてきて、執筆者や知人など関係者のエッセイ、読者の声、次回配本予告などが掲載されている。

よくよく考えてみると、「月報」は月ごとの報告書やレポートの略称で、この記事が載っている『国立国会図書館月報』は国立国会図書館が毎月刊行している広報誌である。全集や著作集のしおりや附録を「月報」

と称するのは、必ずしも毎月出ているわけではないので、少々不思議な表現といえる。

各種、書物や図書館学の辞典類を引いてみると、『図書館用語辞典』、『日本近代文学大事典 第4巻』には、「月報」の項目はあるものの、残念なことに参考文献が記されていない。

そこで、Wikipediaを見ると「月報」の項目の中で全集月報に言及しており、一通りの説明とともに、注で次の文献が紹介されていた。その文献は、日本研究者であるマイケル・P・ウィリアムス「月報への学術的アクセスの深化―記事索引データベースを指して」(英文『Journal of East Asian Libraries』No. 157 2013年10月)³⁾で、論文自体は英文であったが、先行研究や典拠となる文献も詳しく紹介していた⁴⁾。それらの記述を、ごく簡単にまとめると

次のように言えそうだ。

- ・海外にはこのようなものはなく、日本の出版物に固有のものらしい。⁵⁾
- ・本文の正誤表のみならず、書誌、個人の回想など、研究資料や読み物としての価値を有する。改造社の『現代日本文学全集』の「改造社文学月報」(昭和2年1月)がその嚆矢にあたり、発行者のPR誌の面も持つ。散逸することが多い。⁶⁾
- ・図書館では、本体である全集等に貼り付けたり、製本することがある。⁷⁾

国立国会図書館での月報附録類(以下、全集月報または月報と記す)の所蔵状況は、戦後のものに比べて、戦前のものが大変少ない。まずは戦前のものをいくつか見たいうえで、その理由を考えてみたい。



戦前の全集月報の実例

文学関係の月報については、その始まりでもあることから、比較的言及されていることが多い。そこで、

そこから少しずれるものを筆者の所蔵品（いずれも古書店で入手）から紹介してみよう。とはいえ、戦前の月報の全体像をつかんでいるとは言えないので、ほんのわずかの例である。それでも様々な形があることがわかる。

『楚人冠全集月報』11号（日本評論社、1938）（A1）

東京朝日新聞社に「調査部」を設けた新聞記者である杉村広太郎（楚人冠）の全集。この全集はSF作家の星新一も若いころに繰り返し読み影響を受けたという⁽⁸⁾。本体よりも版型が大きく、二つ折りで挟まれていた（四つ折りのものもある）。月報

のページが、各号の通しになっている。月報をページ順にまとめておいたり、1冊に製本する際には便利であるが、かえって本体と一緒に残りにくいかもしれない。

『国語文化講座月報』1（朝日新聞社、1941）（A2）

デザインされた表紙があり、ある程度のページ（16ページ）をもつ小冊子の例。サイズは本体よりも小さい。関係者の座談会を載せるなど、それなりの分量をもつ。

『明治文化』1号（日本評論社、1927）（A3）

吉野作造を代表とする明治文化研究会が編纂した『明治文化全集』の月報にあたる⁽⁹⁾。その初号では「月報」ではなく「雑誌」とうたっているように、体的にはほとんど雑誌のように見える。大きさは、本体とほぼ

同じ。『明治文化全集』の刊行途中1929年7月からは、この月報はなくなり、同時期に並行して刊行していた同研究会の機関誌『明治文化研究』を『明治文化』と改題して、全集の予約者に無料配布するようになった⁽¹⁰⁾（22ページに掲載）。『明治文化全集』は、「その名前に比べ経営的には必ずしも寄与したとはいえなかった」と回想されており、そのため、一種の合理化が行われたのかもしれない。

この例では、月報が雑誌に吸収された形になったが、同じ日本評論社では、『新経済学全集』（1939）に『経済往来』という小冊子を添えており、全集終了後に独立の雑誌とする計画があった⁽¹¹⁾。また、実際に岩波書店では『岩波講座文学』が1933年4月に完結し、その附録『文学』を更に継ぐものとして同月に、新雑誌『文学』を創刊している⁽¹³⁾。

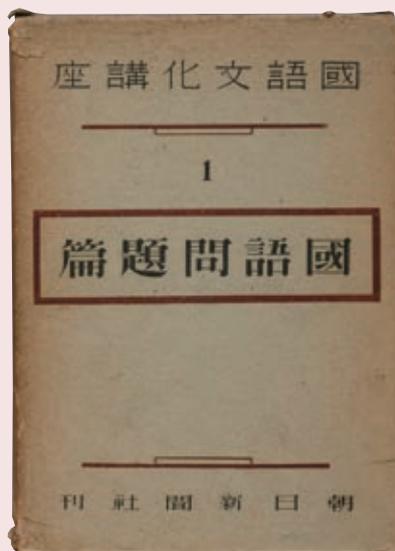


(A1) 四つ折りのものもある。



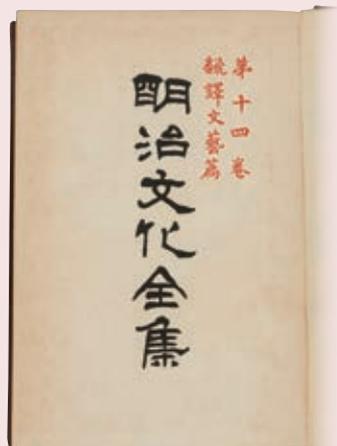
(A1) (右)『楚人冠全集 第11巻』(日本評論社、1938)

(左)『楚人冠全集月報』11号(日本評論社、1938) ※ともに個人蔵



(A2) (右)『国語文化講座 第1巻』(朝日新聞社、1941)

(左)『国語文化講座月報』1(朝日新聞社、1941) ※ともに個人蔵



(A3) 『明治文化全集』と『明治文化』はほぼ同じ大きさ。

(A3) (右)『明治文化全集 第14巻』(日本評論社、1927)

(左)『明治文化』1号(日本評論社、1927) ※個人蔵





(B1) (右)『岩波講座教育科学 第1冊』岩波書店、1931-33 <請求記号 370.8-I922-I>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1743713/3> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開)
 左上の「エト」は閲覧部図書課で製本を頼んだことを示す。そのあとのアルファベットと数字は事務的なもの。

(中央・左)『岩波講座教育科学 附録 教育 第1号～第18号 第10号～第12号』
 岩波書店、1931.10 - 1933.3 <請求記号 Y91-E2004 >
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1908338> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開)
 中央の左上の「セサ」は専門資料部参考課で製本を頼んだことを示す。そのあとのアルファベットと数字は事務的なもの。

国立国会図書館に残っているもの

さて、当館にある月報類は、「リサーチ・ナビ」の「全集月報・付録類」によると、残っているものは、ほとんどは、戦後1950年代以降のものである。『国立国会図書館所蔵全集月報・付録類目録』(1996年刊)の「はしがき」によると、当館では「参考書誌部(現専門資料部)において参考業務を補完するためこれら月報類を収集・管理し、利用に供しており、『出版事典』の「月報」の項では国立国会図書館で提供していると記されている。

残っているものを足すと39件。このほかにも紛れているものがあると思うが、大体これくらいであろう。

残っているものを実際にいくつか見てみたい。ほとんどの月報は、受入印や蔵書印の類が押されていない。そのため、その月報類が、当館が設立されてから集めたものか、国立図書館(帝国図書館の後身)を統合(官制上は1949年4月、蔵書の移転は1961年8月)したときに引き継いだもののかを厳密には判断できない。

『岩波講座教育科学 附録 教育 第1号』第18号 第10号～第12号』岩波書店、1931.10 - 1933.3 (B1)

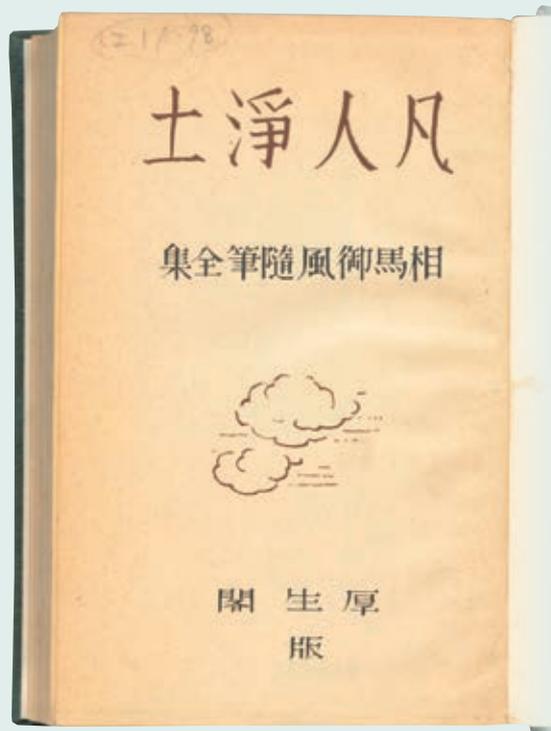
これには、国立国会図書館の受入印(昭和25.4.25)が押されており、受入日のわかる数少ない例である。確実に戦後に受け入れられたことがわかる。なお、単独の雑誌のように見えるが、あくまでも『岩波講座教育科学』の附録である。

戦前刊行分の所蔵についてはどうか、大まかに調べてみる。「リサーチ・ナビ」に記されている検索方法にしたがって、国立国会図書館オンラインの詳細検索画面で請求記号を「Y91*」、出版年を「1945」までとすると、45件のデータがヒットする。それからデジタル化資料として重複してヒットしたものの10件を引いて35件、そこに右記の目録の補遺に掲載

『相馬御風隨筆全集 月報 第1号』

(B2) (右) 『相馬御風隨筆全集 第1巻』厚生閣、1936 <請求記号 914.6-So629s2 > <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1883663/4> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開)
 左上の「Eト」は閲覧部図書課で製本を頼んだことを示す。そのあとのアルファベットと数字は事務的なもの。

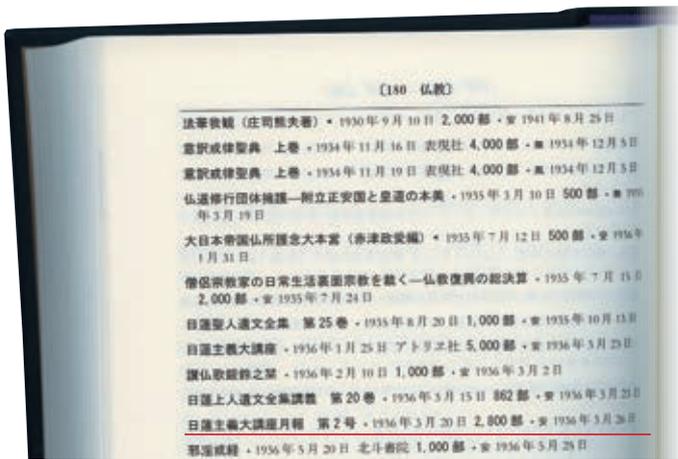
(下) 『相馬御風隨筆全集 月報 第1号』厚生閣、1936 <請求記号 Y91-E2051> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1908302/3> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開)
 左上の「業図」は業務用図書を、「セサ」は専門資料部参考課を示す。そのあとのアルファベットと数字は事務的なもの。



『相馬御風隨筆全集 第1巻』の標題紙裏の受入印。下の番号は登録番号 (accession number)。

第8号』厚生閣、1936. 3. 1937. 4 (B2)
 第1号を見ると、「第一号」「昭和十二年四月号」と枠外にあり、タイトルの上には「二版」と印刷されている。この全集本体の第1巻は、帝国図書館所蔵(昭和11(1936)年2月14日受入⁽¹⁾)と当館所蔵(昭和28(1953)年3月9日受入)(上画像)との二種類あり、奥付をみると前者は昭和11(1936)年2月6日発行で後者は同月17日発行の五版となっている。前者が、この「第二版」と印刷されている月報と一緒に受け入れられたとは考えにくい。後者は昭和11(1936)年の刊行ではあるが、出版社はそこに昭和12(1937)年4月に新たに刷った「第二版」の月報を挟み販売していたのであろう。そして戦後、当館が一緒に入手したのではないだろうか。

このように戦前の月報類は、戦後、当館が戦前の全集類を収集した際に集まったものが含まれているように思われる。または、その可能性は低いかもしれないが、月報類だけ入手したこともあったのかもしれない。



『雑誌新聞発行部数事典 昭和戦前期 附発禁本部数総覧』<請求記号 UE-J2 > p.288

戦前の全集月報がほとんど残っていないのは何故

当館で所蔵する戦前に発行された書籍の多くは、帝国図書館の旧蔵書であり、その大部分は、内務省が出版法により集めた図書を受け取っていたもの(「内務省交付本」⁽¹⁾)である。そうすると、月報は、①内務省から帝国図書館にもともと渡されていなかった、②帝国図書館で廃棄していた、と二つの仮説を立てることができ

①について考えてみると、内務省が月報類を把握していたのかどうか。さしあたり、『雑誌新聞発行部数事典 昭和戦前期 附発禁本部数総覧』⁽¹⁾をめくると、288頁に『日蓮主義大講座 月報』第2号(上画像)を取り締まっている記載がある。少なくとも本体だけではなく月報も検閲対象として把握していたことがわかる。

では、内務省は何故、帝国図書館に送ってこなかったのか。一つには、冒頭の『明治文化』の例でみたよう

に、発行する側が「雑誌」とみなしていたからかもしれない。小林昌樹「国立国会図書館にない本 内務省納本雑誌との出会い」(本誌2017年5月号)で指摘があるように、雑誌は帝国図書館に移されていないかつた。

しかし、さきほどの発禁の例は、事典によると図書の部に含まれていた。図書なのに帝国図書館に渡さな

いのは、何故だろう。内務省の窓口と同じ本が2冊納本され、1冊は正本とされ、実際の検閲に使う。もう1冊の副本は帝国図書館に渡す。正本を検閲で確認する際には本を開くから、月報も挟んだままではなく本体から外して検閲をしていたのではないだろうか。

では、帝国図書館の受け取る副本はどうであったか。内務省内で副本はどう扱われていたのか、検閲の実務はほとんど分かっているが、以下、複数の文献を読み、そのヒントと思われることが見えてきた。同省内では検閲のための正本と副本に分ける前に、それぞれの本そのものにナンバリングをし、その番号と書名

発行者を記す『図書日報』(謄写版)を作成していた⁽²⁾。月報が本体と離れ離れになるのは、この2冊の図書にナンバリングを行うときではないだろうか。

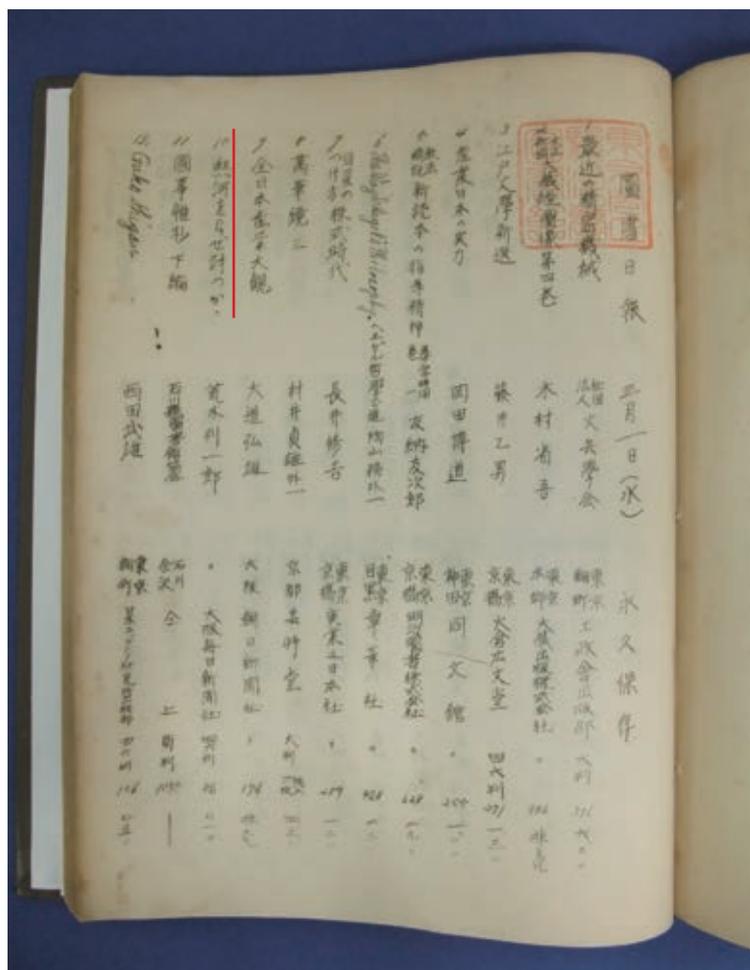
例えば、全集ではないが、大阪毎日新聞社編『熱河をなぜ討つか』に内務省のナンバリングが残っており、『図書日報』で確認できる例である(左頁)。表紙の左上の「10」が、内務省でのナンバリングである。

このようなナンバリングを行う際に、もし外箱や挟み込まれているものがあれば、それらを確認するとともに本体と分けてしまう可能性は高いのではないだろうか。この時に、本体と月報が分かれて、そのままなり、本体のみが帝国図書館に送られてきたのではないかと推測できる。その後、月報はどうなってしまうのか、それは明らかではない。

②の可能性として、月報を受け取って、帝国図書館で廃棄していたかどうかについては、岡田温⁽²⁾をはじめとする帝国図書館に勤めていた人々の回想の類には出てこない。た



大阪毎日新聞社編『熱河をなぜ討つか』大阪毎日新聞社、1933 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1097610> (インターネット公開、モノクロ画像) 右上と背にある赤ラベル(348-144)は帝国図書館時代の乙部図書ラベル。乙部とは、目下の利用価値には乏しいが保存し後日の判断を待つとしていたもの。当時は利用に供されていなかった。そのため、原装の状態が保たれている。黄色ラベル(特 251-87)と㊟は当館で貼ったもの。



(上)『図書日報[昭和8年]3月]3月1日のオモテ(〔内務省〕発行、昭和8年3月)千代田図書館所蔵「内務省委託本」赤線で示した資料が、左の『熱河をなぜ討つか』にあたる。

だし、積極的に集めて残すということもなかったようだ。今のところは、「捨てていたかもしれないが、不明」としか言いようがない。なお、帝国図書館で資料を廃棄した例としては、特殊ではあるが1945年の戦争終結時に同館に持ち込まれた日本軍所蔵図書について、その副本を2、3年後に反故紙として払い下げ図書館員の生活補給金に充てていたことがあるという。⁽²⁾⁽³⁾

①と②の仮説で、どちらが実際に近いかは、今のところは資料が見つからず明らかにしたい。



『明治文化全集』の予約者には、1929年7月から、右の月報の代わりに左の雑誌が配布された。
※ともに個人蔵

資料としての月報

月報は、『図書』の受入から配列まで 学校・図書館・諸官公署・会社⁽²⁴⁾や『図書館の実際の経営』⁽²⁵⁾といった昭和戦前期の図書館の手引きを瞥見しても、言及されていない。戦前、当時の図書館関係者においては、図書館が集めて残す資料として認識されてこなかったのではないであろうか。戦後、戦前の全集月報が復刻されたが、それらは個人コレクションが底本になっている⁽²⁶⁾。

研究者等に、このような月報が注目されるようになったのは、いつ頃だったのだろうか。戦前の月報に関して言えば、『改造社文学月報』については以前から個人が製本したものの存在していたという⁽²⁷⁾。当時の本好き、読書家を作ったのであろう。また、資料的な価値が見いだされて古書市場に表れてきたのはいつ頃なのであろうか。その最初についてはつまびらかではないが、「月報の有無で古書価に差が出るようになったのは昭和三十年代以降であり、漱石や露伴、鷗外らの全集の月報がそれ自体で独自の価値をつけられるよう

になったのは、四十年前後から⁽²⁸⁾であるという。一般に、古書の値段が上昇する背景の一つには、それまで位置づけのよく分からなかったことやものについて研究が発表されてから、その後複数の研究者が資料としての価値を認識したり、関心を引くようになることがある⁽²⁹⁾。

月報の場合には、戦前にも関心を持つ人が絶無であったとはいえないが、昭和20年代の半ば以降にその有用性が広く気づかれ始め関心を引き、次第に古書価格に影響していったのではないだろうか。同時代に、当館のレファレンス・サービス部門で収集、閲覧に供したのは、もちろんレファレンス・サービスに役立つことに加えて、そうした動向も踏まえていたのかもしれない。

いずれにせよ、月報はその本体の全集や著作集自体が大切にされていたのに比べると、同時代には比較的軽んじられていた。そのため、後世になってからいざ集めようとするとなかなか難しい文献となってしまったものの一つといえよう。



- 1 図書館問題研究会図書館用語委員会 編『図書館用語辞典』角川書店、1982 <請求記号 UL2-22> p.118
- 2 保昌正夫「月報」日本近代文学館 編『日本近代文学大事典 第4巻』講談社、1977 <請求記号 KG2-36> p.139
- 3 Michael P. Williams, Deepening Scholarly Access to Geppô: Toward a Collectively-Contributed Article Citation Database "Journal of East Asian Libraries" No. 157 2013.10 https://repository.upenn.edu/cgi/viewcontent.cgi?referer=https://www.google.com/&httpsredir=1&article=1096&context=library_papers
- 4 青山毅 編著『文学全集の研究』明治書院、1990 <請求記号 KE152-E9>や、当館の目録『国立国会図書館所蔵全集月報・付録類目録』国立国会図書館、1996 <請求記号 UP52-G1>を紹介している石渡裕子「冊子目録落穂拾い(国立国会図書館所蔵全集月報・付録類目録)」『参考書誌研究』47号、1997 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3051400> (インターネット公開)、p.97 など。
- 5 石渡裕子、前掲注4
- 6 前掲注2
- 7 前掲注1
- 8 星新一「読書遍歴」同『さまぐれ博物誌』(角川文庫 ほか3-4)角川書店、2012 <請求記号 KH841-L16> p.107-8
- 9 総目次は田熊渾津子 編『明治文化研究会事歴』(関西大学国文学会刊行図書第2) 関西大学国文学会、1966 <請求記号 210.6-Ta631m> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2988625> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開) に収録されている。1992年に『明治文化全集』付録として『明治文化全集』(旧版)月報総集 <請求記号 GB415-G10>が刊行され、この月報記事を再録しているが、残念なことに、案内記事や読書通信、編輯だより等は省略されている。
- 10 「編輯だより」『明治文化』5巻7号、1929.7 <雑 19-153> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1495440/39> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開) p.60、複製版は <請求記号 Z8-956>
- 11 鈴木三男吉『回想の日本評論社』日本評論社、2007、p.31
- 12 鈴木三男吉「創刊当時の想い出」『経済評論』復刊25巻7号、1976年6月 <請求記号 Z3-202> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1429141/11> (国立国会図書館内公開)、p.17
- 13 谷沢永一「春陽堂月報」回想 前掲注4『文学全集の研究』p.53、「編集後記」『岩波講座日本文学』[附2] 文学第11-20] 第20号、1933 <請求記号 910.8-I922-I> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1876314/422> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開)、p.45
- 14 http://mavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-101043.php 国立国会図書館では1950年代以降の月報を全集などの本体とは別に保管し閲覧に供していたが(ごく一部、戦前のものもある)、2001年から、本体に貼付して保管し、閲覧に供している。
- 15 出版事典編集委員会(布川角左衛門代表) 編『出版事典』出版ニュース社、1971 <請求記号 UE2-4> p.126
- 16 国立国会図書館 編『国立国会図書館三十年史』国立国会図書館、1979 <請求記号 UL214-7> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9583671> (国立国会図書館内公開) p.105、p.380
- 17 『相馬御風隨筆全集 第1巻』厚生閣、昭11 <請求記号 699-66> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1245970/3> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開)
- 18 内務省交付本については、「国立国会図書館所蔵の内務省交付本」(リサーチナビ) 参照 https://mavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-100046.php
- 19 小林昌樹 編・解説『雑誌新聞発行部数事典 昭和戦前期 附 発禁本部数総覧』(文庫文献類従 24) 金沢文圃閣、2011.12 <請求記号 UE2-J2>
- 20 小林昌樹「内務省納本雑誌との出会い」(国立国会図書館にない本)『国立国会図書館月報』673号、2017年5月 http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_10338395_po_geppo1705.pdf?contentNo=1#page=9 (インターネット公開)、p.7-11
- 21 小林昌樹「帝国図書館本における納本分の見分け方」『文献継承』(26) 2015年4月 p.5 (インターネット上にある金沢文圃閣のページで公開) 及び、牧義之「内務省発行『図書日報』と納本事務」『内務省委託本』調査レポート 第6号、2013.3 (千代田区立千代田図書館編『千代田図書館蔵「内務省委託本」調査レポート総集編 第1号-第16号 2012年度-2016年度』千代田区立千代田図書館、2017 <請求記号 UC71-L9>) (https://www.library.chiyoda.tokyo.jp/findbook/collection/naimusho/report/naimushou_report06.pdf) に『図書日報』の説明がある。
- 22 岡田温「日上野図書館の収書方針とその蔵書」『図書館研究シリーズ』5、1961 <請求記号 Z21-127> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1010951?tocOpened=1> (国立国会図書館内公開)、複製版 <請求記号 Z79-B153> などがある。
- 23 山崎元「『十五年戦争』が終わった時が十五才」(私の8月15日: その時、あなたは何をしていましたか?-2- (戦争と図書館員 -2-<特集>) 『みんなの図書館』1986.8 (111) <請求記号 Z21-882> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3470252/12> (国立国会図書館内公開)、p.17
- 24 林靖一『図書を受入から配列まで 学校・図書館・諸官公署・会社』大阪屋号書店、1933 <請求記号 O14-H386t-(3)> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1762971> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開)
- 25 乙部泉三郎『図書館の実際の経営』東洋図書、昭14 <請求記号 O10-O86ウ> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1115290> (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開)
- 26 青山毅 編『昭和期文学・思想文献資料集成 第3輯(春陽堂月報)』五月書房、1989、同集成の第4輯(世界文学月報)1990、第5輯(改造社文学月報)1990、第10輯(近代劇全集月報)1991 <請求記号 YP18-95> など。
- 27 谷沢永一、前掲注13
- 28 紀田順一郎「月報論」同『知性派の読書学』柏書房、1977 <請求記号 VG1-H974> p.222
- 29 今年亡くなった横田順彌氏が、それまで謎の人物であった羽化仙史を森鷗外の史伝で著名な渋江抽斎の息子(渋江保)であると明らかにしたところ、その古書価が上昇したことがある(横田順彌『日本 SF こてん古典 3』(集英社文庫) 集英社、1985 <請求記号 KG381-84> p.128-129)

国際子ども図書館の歴史あるレンガ棟を抜けた先、3年前に完成したアーチ棟2階に、他の部屋から離れてぼつんと存在する部屋があります。その名は児童書研究資料室。字面だけ見ると、厳めしく感じます。「児童書に関する調査研究のための資料室」と説明を補ってみても、あまりイメージは変わりませんね。この文章を書いている2月

現在、国際子ども図書館では創刊100年を迎えた児童雑誌『赤い鳥』に関する展示会がレンガ棟で開かれています。児童書研究と聞くところから「児童文学の古典」、あるいは絵本を思い浮かべる人もいるかもしれませんが、7か月前、資料室のカウンターに立ち始めたばかりの私自身もその一人でした。

でも、実際はどうでしょうか。資料室に開架されている図書を少しだけ見てみましょう。『昭和少年SF大図鑑 昭和20〜40年代僕らの未来予想図』『サンタクロース学』『江戸の遊び絵づくし』『猫の大虐殺』なんて資料まであります。意外に思われたでしょうか？

このように、国際子ども図書館は「児童書研究」ということばだけでは想像できないほど幅広い資料を所蔵しています。利用者の多様な調査研究の

要望に応えるため、資料室では一見ただけでは研究資料には見えないような、様々な資料を取り揃えているのです。

また、『赤い鳥』のような日本の「児童文学の古典」の調査に役立つ資料のほか、外国の神話・伝説・昔話に関する資料も充実しており、国際子ども図書館の「国際」性を生かした調査も行えるようになっていきます。多くの国内刊行の児童書に加え、海外の絵本・児童文学も研究対象として想定していることも、この資料室ならではの特徴です。

……これらの資料の選定・排架にはいつも悩みがつきものです。作家のエッセイ一つとっても、その人の著作のうち児童書がどの程度を占めているか、創作論と作家研究のどちらに分類すれば利用者のニーズをより満たせるか、などを検討しなければなりません。一筋縄では行きませんが、「児童書研究」の奥深さに触れることができる仕事です。

奥まった場所にあり、入室手続きが必要な児童書研究資料室ですが一度足を踏み入れてみれば、他の部屋とは一味違う、予想もしていなかった本に出会えるかもしれません。

(資料情報課書誌情報係 凝膠寒天)



「児童書研究資料室」は
こわくない



本屋に

ない

本



世界の軌跡を未来の英知に

Finding wisdom for the future
in the tracks of the past

京都外大図書館の稀観資料 学校法人
京都外国語大学創立70周年記念稀観
書展示会 展示目録

京都外国語大学付属図書館、京都外国語
短期大学付属図書館 編集・発行
2017.5 187p 30cm
<請求記号 UP74-L14>

貴重書の展示は難しい。豪華な装丁の本や、美しい挿絵や流麗な飾り文字があるものはよいが、そうでなければ、興味のない人からすればただの古い本であり、どうしても地味になりがちである。手に取って読むこともできないし、仮にページを繰る機会を得ても知識がなければ読めない資料も多い。なぜ貴重なかを伝えるのは、難しいのだ。

本書は京都外国語大学創立70周年記念として、平成29（2017）年度に開催された展示会の図録である。同大図書館は、語学を通じた国際地域研究を推進するため、世界各国・各地域の言語による資料を収集している。なかでも、世界の稀観資料の収集は、森田嘉一現理事長・総長が図書館長を務めた昭和43（1968）年〜昭和55（1980）年にかけて積極的に進められ、稀観書コレクションとして同大図書館の所蔵資料の中心的存在となっている。また、この稀観書コレクションは、稀観書展示会と銘打って昭和43（1968）年から展示に供されている。

美しい写真を一通り鑑賞した後、紙面の隅々に目を向けてみる。本書は第1部「世界の著名人の筆跡と書物」、第2部「書物の発達と各国の史料」から成る。第1部では、解説文とともに、国家指導者、科学者、思想家、日本研究者等を一人につき見開き2ページで紹介している。左ページには自筆の書簡、右ページには著作の刊本を並べることで、著者のことがくっきりと確かな存在として感じられる。第2部では、紙や書物、印刷技術の発達とあわせて、イタリアルネサンス、アメリカ合衆国建国といった世界的な出来事に関する資料、さらに日本と世界をつなぐ『東方見聞録』、『解体新書』などの資料が紹介されている。また、すべて英訳が付いているので、海外の研究者にも使

いやすいものとなっている。本書全体を通して、資料同士を意識的に関連付けて紹介しているようだ。そうすることで、読み手の理解を深め、それぞれの貴重書のどこが貴重なのかさまざまな切り口で伝えることに成功している。その書物が生まれ、通過してきた時代の臨場感という、電子媒体では得られない紙媒体特有の魅力もより明確に感じられるだろう。「世界の軌跡を未来の英知に」と題されたこの展示目録からは、書物のもつ力と、書物と共に歩んできた人々の歴史と後世へのメッセージを発信していこうという書き手の熱意が伝わってきた。

（吉井伶奈）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

古典籍、憲政資料等を「国立国会図書館デジタルコレクション」に追加しました

国立国会図書館は、デジタル化資料約4,900点を「国立国会図書館デジタルコレクション」に追加しました。

「国立国会図書館デジタルコレクション」で提供するデジタル化資料の総数は、今回追加した資料を含め、約269万点です。

国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>) に追加した資料 (3月12日)

コレクション	追加数	公開*
古典籍資料	約400点	インターネット
憲政資料	約700点	インターネット (一部館内限定)
日本占領関係資料	約1,800点	
プランゲ文庫	約2,000点	館内限定

* 本文をインターネット公開していない資料についても、書誌事項(タイトル、著者等)はインターネットから検索できます。

調査資料『21世紀のアメリカ』及び『極端気象の予測と防災』『インフラ老朽化対策と維持管理技術』『生体認証技術の動向と活用』を刊行しました

調査及び立法考査局が平成30年度に行った調査プロジェクトの成果として、総合調査報告書『21世紀のアメリカ』及び科学技術に関する調査プロジェクト報告書『極端気象の予測と防災』『インフラ老朽化対策と維持管理技術』『生体認証技術の動向と活用』を刊行しました。

【総合調査】

『21世紀のアメリカ』(調査資料2018・3)

政治、経済、文化等のあらゆる分野において我が国と密接な関係を持ち、その動向分析が我が国の諸課題を考える上で不可欠なアメリカに焦点を当てました。トランプ大統領は、2017年1月の就任以降、環太平洋パートナーシップ(TPP)協定からの離脱やパリ協定からの脱退を表明するなどアメリカ第一主義の対外政策をとり、内政面ではメキシコ国境の壁建設を目指すなど、これまでの大統領と異なる政策を次々に打ち出しています。さらに、度重なる政府高官の交代による政権運営の不安定さなどもあいまって、トランプ政権下のアメリカは、世界に強い影響を与え続けています。本報告書では、トランプ政権下を中心とした現代アメリカの政治、安全保障、税制、通商、情報通信、気候変動対策等の諸分野について、文献調査、現地調査、有識者からのヒアリング等を行った成果を取りまとめた8編の論稿と年表を収録しています。

【科学技術に関する調査プロジェクト】

『極端気象の予測と防災』(調査資料2018・4)

近年、豪雨や猛暑などの極端な気象の頻発やこれに伴う災害の激甚化が見られ、国民の生活や社会全般に大きな影響を及ぼしています。本報告書では、極端気象とは何かから始め、気候システムと地球温暖化や極端気象との関連、降雨の観測と予測技術について概観した後、防災の歴史的な経緯と現状を示し、防災教育、防災情報と住民避難、災害廃棄物に関する諸課題について考察しました。

『インフラ老朽化対策と維持管理技術』(調査資料2018・5)

1970年代前後の高度成長期に集中的に整備された道路や上下水道などの土木インフラや公共施設の老朽化が進み、国や地方公共団体にとって大きな課題となっています。本報告書では、技術面・経済面・制度面・合意形成の4つの側面から現状を取りまとめた上で、インフラの種類ごとにどのように取り組むべきかを整理しました。

『生体認証技術の動向と活用』(調査資料2018・6)

生体認証技術とは、顔・指紋・虹彩や歩容・署名といった身体的・行動的な特性・特徴に基づいて、人物を自動的に確認・識別する技術を言います。この生体認証技術の利用に伴う新たなリスクに対し、ルールや監督体制の構築等が課題となっています。本報告書では、その技術動向や実用化の状況、諸外国の法規制等について整理した上で、我が国における今後の課題を明らかにするとともに、政策の方向性を考察しました。

NDL Topics

これらの報告書を含め、国立国会図書館が国政審議の参考資料として作成した刊行物は、ホームページで全文をご覧になれます。是非、ご活用ください。

○国立国会図書館ホームページ▽国会関連情報▽『調査資料』▽2019年刊行分
<https://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/document/2019/index.html>



新刊案内

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第279号

フランスにおける性犯罪防止対策強化―性的暴力及び性差別的暴力との闘いを強化する2018年8月3日の法律第2018-703号―
 2017年イタリア上院規則改正―会派の固定及び委員会の役割の拡充に向けて―
 韓国の粒子状物質対策―特別法の制定を中心に―

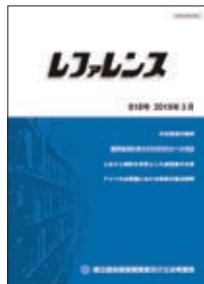
中国の英雄烈士保護法
 オーストラリアのオンライン安全強化法改正―性的画像の同意なしの共有に関する規制―



A4 141頁 季刊 1,800円 (税別)
 ISBN 978-4-87582-834-1
 発売 日本図書館協会

レファレンス 818号

中台関係の動向―「1つの中国」原則をめぐって―
 国民経済計算の2008SNAへの対応―平成23年基準改定と今後の取組―
 ふるさと納税を背景とした諸現象の本質
 アメリカ合衆国における政府の憲法解釈



A4 100頁 月刊 1,000円 (税別)
 発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812



#12 東京本館南口の新緑

第31回納本制度審議会

3月18日、第31回納本制度審議会が、審議会委員10名、専門委員3名が出席して東京本館で開催されました。審議会では、事務局から、有償等オンライン資料制度収集の今後の進め方について報告を行い、質疑応答がありました。

納本制度審議会委員・専門委員名簿

(五十音順 敬称略) (平成31年3月18日現在)

- 会長** 中山 信弘 東京大学名誉教授
- 会長代理** 福井 健策 弁護士
- 委員** 植村 八潮 専修大学文学部教授
江上 節子 武蔵大学社会学部教授
遠藤 薫 学習院大学法学部教授
相賀 昌宏 一般社団法人日本書籍出版協会理事長
角川 歴彦 株式会社KADOKAWA取締役会長
近藤 敏貴 一般社団法人日本出版取次協会会長
齋藤 誠 東京大学大学院法学政治学研究科教授
鹿谷 史明 一般社団法人日本雑誌協会理事長
重村 博文 一般社団法人日本レコード協会会長
白石 興二郎 一般社団法人日本新聞協会会長
永江 朗 公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員長
- 根本 彰 慶應義塾大学文学部教授
野原 佐和子 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授

専門委員

- 佐々木 隆一 一般社団法人電子出版制作・流通協議会 監事
- 三瓶 徹 一般社団法人日本電子出版協会事務局長
- 樋口 清一 一般社団法人日本書籍出版協会事務局長



納本制度審議会の様子
審議会に関する情報は、以下に掲載しています。
<https://www.ndl.go.jp/jp/collect/deposit/council/index.html>

おもな人事

- △辞職▽
平成31年3月31日付け
専門調査員 調査及び立法考査局議事官庁資料調査室主任 渡邊 幸秀
- △異動▽ ※ () 内は前職
平成31年4月1日付け
専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任 (専門調査員 調査及び立法考査局文教科科学技術調査室主任) 岡村 美保子
- 専門調査員 調査及び立法考査局海外立法情報調査室主任 樋口 修
総務部副部長 (関西館総務課長) 藤本 和彦
主幹 調査及び立法考査局総合調査室付 (調査及び立法考査局国会レファレンス課長) 田中 嘉彦
主幹 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付 (調査及び立法考査局海外立法情報課長) 岡村 志嘉子

豊田 透

専門調査員 調査及び立法考査局外交防衛調査室主任 (専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任) 山崎 治

専門調査員 調査及び立法考査局文教科科学技術調査室主任 (専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室付) 石渡 裕子

専門調査員 調査及び立法考査局社会労働調査室主任 (電子情報部長) 小寺 正一

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室付 (調査及び立法考査局次長) 小池 拓自

専門調査員 調査及び立法考査局議事官庁資料調査室主任 (主幹 調査及び立法考査局付、国会分館長事務取扱) 林 雅樹

電子情報部長 (専門調査員 調査及び立法考査局外交防衛調査室主任) 佐藤 毅彦

調査及び立法考査局次長 (主幹 調査及び立法考査局総合調査室付、調査企画課長事務取扱) 森田 倫子

主幹 調査及び立法考査局総合調査室付、調査企画課長事務取扱 (主幹 調査及び立法考査局政治議事調査室付、政治議事課長事務取扱) 小林 公夫

主幹 調査及び立法考査局経済産業調査室付、経済産業課長事務取扱 (主幹 調査及び立法考査局総合調査室付) 樋口 修

総務部副部長 (関西館総務課長) 藤本 和彦

主幹 調査及び立法考査局総合調査室付 (調査及び立法考査局国会レファレンス課長) 田中 嘉彦

主幹 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付 (調査及び立法考査局海外立法情報課長) 岡村 志嘉子

主幹 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付 (調査及び立法考査局海外立法情報課長) 岡村 志嘉子

5

NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 1 9 . 5

NO.697

MAY
2019

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Imo hyakuchin: sweet potato dishes of the Edo Period
- 05 Browsing library materials—deciphering photographs (1)
Saionji Kinmochi and his photographs
- 15 Books not found in the NDL:
Supplement of complete works published before WWII
- 24 <Tidbits of information on NDL>
Don't hesitate to use the Researchers' Reading Room
- 25 <Books not commercially available>
Sekai no kiseki o mirai no eichi ni
- 26 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和元年5月号 (No.697)

令和元年5月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 三浦良文
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
F A X 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<http://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 1 9 . 5

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

六